



2012年(平成24年)

1月号(No. 800)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

2012年の日本山岳会

JAC-YOUTH2011年の成果と今後の抱負	1
全支部の行動参加で「山の日」に広がり	3
新たな組織の活性化を目指して	5
富士山に生かされ、登れる喜び	7
『山』800号記念	
井戸を掘った者を忘れず——800号に寄せて	8
編集担当者が語る会報の思い出	10
思いがけない収穫/会報にも確固とした価値観を	
/編集はプラス志向で/700号のカラー記念号	
歴史と伝統に裏づけられた 日本山岳会の『山』	12
井上靖『氷壁』とその時代	
——ナイロンザイル切断事件と「カエル会」の交流	13
『三省堂日本山名事典』の改訂版を出版	14
メスナーのプロジェクト最後の山岳博物館	15
東西南北	16
中国四川大地震 谷川岳の馬場保男さん	
活動報告	17
集会委員会	
図書紹介	18
会務報告	20
ルーム日誌	22
会員異動	22
新入会員	22
図書受入報告	22
INFORMATION	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

2012年の日本山岳会 JAC-YOUTH2011年の成果と 今後の抱負

P Tリーダー 野沢誠司

新たな1年を迎え、今年の抱負を3人の方に語っていただいた。若い会員たちと一緒に行動してきたJAC-YOUTHの活動を野沢理事に、盛り上がりつつある「山の日」制定に向けた動きを永田理事に、そして尾上会長に今年1年の課題と展望を綴ってもらった。

冬(2011年1月～3月)

前年暮れまでの机上講習(ロープワーク、冬山気象、救命救急法)が終わってクリスマスになったとたん、大寒波の襲来でスキー合宿は登りも下りもラッセル訓練からスタートした。教える方のベテランは「五六豪雪は凄かった」とか「五九豪雪もえなかった」「〇八豪雪ぐらいになるかな」と新人を

脅かして楽しんでいたが、こういう武勇談(失敗談を聞きながら何年かけて成長していくものだから、青年部諸君もベテランのいない所で次の新人に武勇談のひとつやふたつはしてもらいたいものだ。現在は大学山岳部も衰退し続けているが、社会人山岳会の衰退はもっと早く激しい。20年ほど前に、50歳前後で始まった中高年登

山ブームはそのまま平行移動して徐々に自然減少。長期の不況で20代前半では本格登山を目指す気力が失せている。「山ガール」も30代になると夏山縦走だけでは飽き足らず雪山を目指すようになってきた。

本会会員であり、プロガイドの松原君の指導で、1月の講習会は廻り目平に設置されたアイスツリーで、アイスクライミングの初体験。街中のジムに行く感覚だが冷たいオープンエアと太陽が眩しい。慣れてくると互いに確保しながら、応援や講評が飛び出して、よい雰囲気になってきた。別のグループは新品の8人用テントの設営に夢中である。いつも1～2人用のテントしか知らないの、「すごく大きいですね」「このテン

トは2月の八ヶ岳で使うんだ。みんなで張って、みんなで飯炊きして、みんなで寝るんだよ」昔に比べて重量は軽い。大きなテントには安心感がある。この感覚も若者には新鮮だ。

翌日は暗いうちから金峰山に登りだした。総勢15名。今冬一番の寒さで稜線はマイナス20度C以下になるだろう。借りものの装備も多いがみんな元気である。寒さや経験不足を吹き飛ばすパワーが青年にはある。ベテランにエスコートされながら、ほとんど登山者に会うことなく頂上に着いた。帰りの温泉で聞いてみた。「どうだった?」「寒かったけれど、充実していてもよかった!」

2月の講習会は八ヶ岳・硫黄岳へ、赤岳鉾泉泊まりで登った。

予報では土曜日だけ好天で日曜日は荒れるとのことだ。初日のうちに登ってしまおうということになり、馬力をかけて登り続ける。こちらは10人だが、青年部は行者小屋にテントを張って赤岳をねらう。こちらも10人だ。登山自肅中の理科大山岳部もJACの講習会ということで、特別に許可をもらって参加している。彼らはテント泊なのでわれわれより3倍大きいザックであるが、久しぶりの冬山に目が輝いている。そうだ、今日は快晴だ、早く稜線へ登ろう。

鉱泉に荷物を置くのもどこかしくアイゼンを軋ませながら登っていく。青年には疲れなどないのだ。

西に傾いた日差しはなか、大展望の頂上に駆け上がる。広い頂上をゆつくり歩きながら誰もが感動に浸っている。握手。記念撮影。一通り済んだところで気を引き締めて下山にかかった。

翌日は、だんだん悪くなる天気なのか、ジョウゴ沢で雪上訓練とビーコン捜索を行なった。軟雪で形だけになってしまったが、こういうものだということは分かっていた。美濃戸口にはわれわれが先に下りたが、みんなの

顔は充実した様子であった。青年部は三々五々下りてきたが、悪天候を突いてアタックしたのもつと充実したようである。大きな自信になったと思われ、ベテランはみんなうれしくなった。

東日本大震災は、われわれの活動にも影響を及ぼした。谷川岳での雪洞構築・雪崩講習会は交通事情の悪化とガソリン不足で中止になった。青年部も動揺し「とても山に登ろうとは思えない」とか「こんな時に山など登るのは不謹慎」という意見もあった。

ベテランは「大変な状況で被災者には同情するし、できるだけのことはしたい。しかし、阪神大震災の時もわれわれは登っていたよ。登山は個人の心の問題で、本当に山の好きな心を制圧することはできないんだ。困難になればなるほど、強烈に登りたくなるんだ。登ろうとする気持ちを抑えつけてはダメだよ」と言った。

そしてわれわれは大震災の2週間後、日和田山の岩場でささやかな再スタートを切った。岩にかじりつく若者の顔は、全員輝いていた。

春(4〜6月)

昨年は2月ごろから土日が悪天候になるパターンとなり、個人山行企画はかなり潰れた。大震災の影響は自他・内外にじわじわ広がり、この後の講習は落石事故やベテランの負傷などで見ざるべきものはあまりなかった。ただし、国立登山研修所の講習に参加した2名は登攀に精進し、この後青年部で中核的な存在になってくれたのはありがたいことであった。

夏(7〜9月)

暑くなってくると、沢登りが恋しくなってくる。講習修了生で青年部を結成した者を中心にベテランもまじえ、7月上旬から個人山行形式で奥多摩あたりから沢登りが始められた。ロープワークには比較的慣れている者が多かった。溪流シューズさえ手に入れば参加可能という手軽さが受けて、台風などで中止もあったが、11週間のうち8週間にわたって週末に沢登りが実施された。延べの参加者は50人近くになり、そのうち10人は沢初体験としてデビューを果たした。

特に8月下旬の奥秩父、東沢・釜ノ沢では一昨年は新人であった部員が昨年はリーダーとしてチャ

レンジすることになった。天候は雨、曇り、雨とよくなかったが、7人のメンバーをよくまとめ、無事、目標達成したことは収穫であった。私事ではあるが、奥多摩の沢で高校ワングルの長男と初めてザイルを組んで登り、感激した。

まだまだ上越では入門コースの沢が多いので、来年はワンランク上を目指したい。9月のシルバークには穂高岳集中合宿を企画した。これは一昨年から立山・剱岳で行なっていた波状登山行を大規模化したもので、登攀ガイドが剱沢や涸沢に一週間定着し、土日祝の休みで入山する者と平日休んで入山する者をつないで実力に見合った周辺の岩場にチャレンジするという企画である。最大宿泊人数は16名であったが、延べ宿泊人数は50名を超え、食料係をはじめ各係はなかなか頭を使う計画であった。残念ながら前半は台風のため登れなかったが、後半は天気に恵まれ、前穂高4峰正面北条・新村ルートや前穂高北尾根、北穂高東稜などトレースすることができた。

秋(10月〜12月)

長野県警山岳遭難救助隊と近

藤謙司ガイドの講演会で幕を開けた。毎年のことながら定員100名のホールが一杯になり、関係各位の努力に感謝申し上げたい。今年で3年目のこの企画が今後も続いてくれることを期待する。

この時期に企画がないのは、グリーンシーズンをどう過ごすか方針が定まっていけないせいで、来年の反省材料である。しかし、青年部の個人山行は活発に行なわれ、クライミングの集会は毎週行なわれており、来たるべき冬山に向けて準備を進めている。机上講習会も始まり、その年もまた15名前後の講習生が第3期生として入ってくる予定である。

YOUTHに参加する人や青年部のみんなには常日頃から、登山にはいろいろなジャンル（縦走、岩登り、沢登り、冬山、山スキーなど）があるので、できるだけそれらの異った経験を1度は体験してもらいたい。どのジャンルが自分の嗜好に一番合っているか若いうちに見つけることは、登山と自分の寿命を延ばすことにつながる。楽しいことは制限されてもやるのが人間で、好きなことを伸ばすのが正しい登り方・生き方である。

ある。そして、他のジャンルの何たるかを知っておくことは、自分の登り方・生き方に必ずプラスになるはずだ。自分の生き方の物差しを持つている人は少ない（たいていの人は付和雷同、周りに流される）が、それを持っている人は減多なことでは流されない。今の若者がほしがっているものは、実はこれだろう。

そして

今年は、1～4月のYOUTH講習を確実に実施し、講習生より新しい青年部員を確保することだ。そして4月以降のグリーンシーズンの行事を強化して春・秋のブランクを埋めたい。プロジェクトは永遠に続くものではないので、計画とは別に、この活動が恒久的に継続していけるような組織体制へ脱皮していきたいと考えている。具体的には指導委員会、青年部、学生部、YOUTHを統合して中堅・若手の会員獲得、教育、研究、企画をできるだけ一元化した「YOUTHクラブ（仮称）」に集約したい。人的、予算的にも効率のよい組織にリニューアルすべく調整を進めている。ちなみ

に、現在の40歳未満の本会会員は全部で130名であり、そのうち平成21年度以降の入会者は65名を数えるまでになった。

現在は大学山岳部のOBが主体を担っているが、その系統だった育成システムを土台として、そこで育った会員が新人を教育して、理想的なおとなの社会人山岳

2012年の日本山岳会

全支部の行動参加で「山の日」に広がり

「山の日」PTメンバー 永田弘太郎

「山の日」制定に向けて、本年度はステップアップするための重要な1年になると考えられる。山岳5団体が中心となつて、目的を見失うことなく他団体を受け入れ、バランスをとって前進できるか。また、プロジェクトをはじめ、大きな役割を期待されている当会の会員一人ひとり、あるいは支部、組織の力で、いかに運動を展開できるか。

当会に「山の日」制定プロジェクトが発足して2年3カ月、山岳5団体による「山の日」制定協議会が発足して4月でまる2年が経過する。この間、『山を考える』

会を目指していきいたいと思つている。本会は今まで「できあがった岳人」だけを集める会であつた。しかし、それだけではもう続かないのである。自前で人材を作る組織でなければ長続きはしない。ようやく本会も105年経て、まともな社会人山岳会になりつつあると思う。

のリーフレット配布などで、運動の認知度はある程度高くなった。

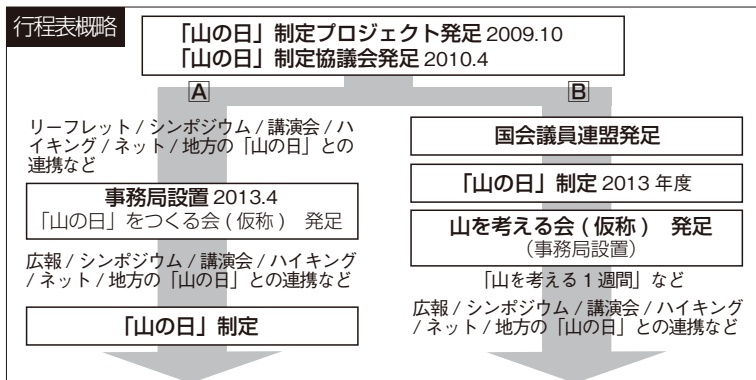
当会内では、いくつかの支部で地域の「山の日」への積極参加があり、山の日づくりの趣旨に沿った企画や事業が催されているものの、全体として、盛り上がりに欠けていることは否めない。

●国民運動と超党派の議員活動

「山の日」をつくるための道筋はふたつあり、それぞれを並行して進めないと成果は上がらないだろう。

ひとつは私たち自身が作り上げていく道である。仲間を誘い込み、幅広い国民運動として展開し

行程表概略



ていく道（左図A）であり、もう一本の道は国会議員へ働きかけて祝日を実現する道（左図B）である。Bの国会議員への働きかけは、いくつかのルートを通じて行なわれ、与党、野党の別なく足がかりを作りつつある。学生時代に登山に熱中した民主党の中堅、若手の議員、自民党の複数の有力議員、それに若手女性議員も趣旨に賛同

してくれた。超党派の議員懇談会または議員連盟のようなグループをつくる動きで、各党に「核となる議員をリストアップしたと聞いた。ただし、わが国には国民祝日が多いので「新しい祝日は要らない」という意見も少なからずある。

●「山の日」づくりの真の目標

超党派の議員連盟発足が準備段階までできたこととは別に、私は、この際、行動計画を再検討してみる必要があると考えた。「海の日」の祝日化が実現するまでには数十年という年月を要している。また、すんなりと「山の日」が制定された場合でも、プロジェクトおよび協議会は目的を達成したとはいえないと思うからである。

私たちが「山の日」を作る目的は、アピールにあるように「日本に住むすべての人々が、山という自然を見つめなおし、深いかかわりを考える日にしたい」ためである。そこで、制定後に「山を考える会」を発足させ、事務局を設けることを前提としてBプランとした。いうまでもなく日本の山は世界的に特異である。私たちの目の前には、世界に類を見ない豊かな自然と美しく多彩な自然景観があ

る。そして日本人はこの自然と共存してきた歴史を持っている。かけがえのない山々を広く知ってもらいたいというのが、「山の日」制定運動の究極の目的である。

●Aプランに3本の柱

国民運動の道筋を採るのがAプランで、3本の柱がある。

①シンポジウムなどのイベントを行ない、より多くの人々に呼びかけていく。11月20日に行なわれた岳都・松本「山岳フォーラム2011」（本紙12月号参照）や6月に予定されている「国際山岳年プラス10」への参加計画がその例だ。

②リーフレットの作成、配付を継続する。いま「動物編」を作成中。③1年後を目標に山岳5団体で事務局を設置。インターネットも利用して参加協力団体を募り、広く、長期的に展開する。

なお、事務局とは、両プランとも、定期的にシンポジウムなどを行なってより多くの人々に、継続的に山を考えてもらうための、本部機能を持つ常設機関である。

●支部を通じて全国展開

Aプランの①はこれまでの布石を行動に移すもので、支部の活

動を主体とした全国展開が必須条件となる。

すでにいくつかの支部では実績を積み上げている。9会場に1万人が集まるという広島支部の『ひろしま「山の日」県民の集い』、山梨支部は毎年『山の博覧会——山を知ろう 山へ行こう』を開催し、18年におよぶ山梨県の「山の日」を支えている。また、北海道、東京多摩、東海、関西支部などでは趣旨を同じくするイベントやアピールが催され、栃木では県独自の「山の日」制定を目指した動きがある。

スタッフや資金不足などの事情から、まだ多くの支部が活動に踏み切れないことは事実だが、プロジェクトも昨夏、実働部隊を増員したことで、少しは後方支援もできるようになってきた。今後、全国各地で「山の日」の狼煙を上げていただきたい。

さる10月の関東知事会議では、栃木県の福田知事が「山の日」制定・祝日化について「国に要望書を送る旨を提案し、了承された（下野新聞）」。また松本市や長野県でも「山の日」制定の動きがあり、全国的に気運が高まっていること

は確かである（現在、都道府県の「山の日」は約10件、森を含めると約30件におよぶ）。支部単独では活動しづらいかも知れないが、地方自治体や企業との協力でイベントを開催できるのではないだろうか。

●公益社団法人として

当会は4月を期して「社団法人」から「公益社団法人」となる見通しである。「公益社団法人」への移行は、時代の流れ、社会的な要請を受けて、関連団体や企業とも連携しやすくなると思われる。組織の活動や人間の生きがい、より社会的になり、NPOやボランティアの活動が活発化し、企業もソーシャルビジネスへと向

かう潮流である。

もうひとつ。私見だが、これらの百年は人間中心の文化から自然中心の文化へと軸足を移していく時代になるということである。自然と闘う挑戦的な山登りから、ストレス解消や健康志向の山登り、さらに自然を舞台とするアーティスティックな山登りへと文化が広がるようとしている。当会はこの2軸に立つ魅力ある会としての可能性を有している。

「山の日」制定へ向けての運動は、ようやく土台が固まってきたところである。体力に限りがあるため頂上に向かって直登するわけにはいかないが、一歩ずつ確実に前進してゆきたい。

2012年の日本山岳会

新たな組織の活性化を目指して

会長 尾上 昇

新しい年を迎え、会員の皆さま方には、いかがお過ごしでしょうか。

昨年我が国は、まさに激動、激変の年でありました。東日本大震災とそれに伴う福島原子力発電所の事故、さらには、台風12号

による紀伊半島の甚大な被害など未曾有の大災害に見舞われた年でした。また経済面におきましても、欧米各国の金融不安に端を発した異常な円高は、物づくりをベースとする我が国の産業に多大な影響をおよぼしました。

東日本大震災に対しましては、

JACもその復興支援のための募金活動を実施いたしました。お陰さまで全国の多くの会員の皆さまから470万円余りのご厚志を賜り、その使途につきまして、昨年の『山』11月号に報告させていただきました。改めてここにご厚情を賜りました会員の皆さま方に衷心よりお礼を申し上げます。

年頭にあたりまして所感の一端を述べさせていただきます。

昨年は、3月と6月の2回総会がありました。重点の審議事項は、3月の総会では、平成23年度予算の審議と公益社団法人移行の決定でした。6月の総会は、新法人移行にともなう定款の審議、平成22年度の決算の承認、任期にともなう新しい役員人事の承認でした。両総会とも、会員の皆さまから大変手厳しいご指摘を受けましたが、最終的には、多くの賛同を得てご承認をいただきました。

私は過去2年間を振り返りその反省を踏まえ、新たな任期の2年間のJAC再生のためのプラン作りに着手いたしました。幾度も指摘させていただいていますように、現在のJACの抱える最大の

課題は、会員数の斬減傾向と会員の高齢化です。そして23年度は、公益社団法人化に向けた申請の年でもあるということです。

まずこの公益社団法人申請の手続きですが、公益法人移行プロジェクトチーム（以下PT）の懸命な努力によりまして、昨年10月24日に窓口である内閣府の公益等認定委員会に無事申請書の提出を終えることができました。予定では、大きな瑕疵のない限り、今年4月1日付をもって公益社団法人日本山岳会が誕生いたします。これまでのPTの皆さまの払われた並々ならぬ努力に改めて感謝の意を表させていただきます。このJACの公益社団法人化につきましては、多くの会員の皆さまから数々のご心配をいただきました。4月1日より新しい公益社団法人として日本山岳会が再出発いたしますが、これまでと活動や事業展開が何ら変わることはありません。どうぞご休心下さい。

次に会員の減少と会員の高齢化についてです。これにつきましては、一昨年の会長就任にあたりJAC-YOUTH PT、支部活性化PTを立ち上げ対応に当たり

ました。会員の増強、特に若い会員の獲得と支部の活性化を目的としたPTです。そのほかには、継続事業となっている山の日の制定運動を推進させる山の日制定PTと新公益法人移行検討PTも併せて立ち上げさせていただいています。

平成24年度の新年度に入りまして、私は、更なるJACの課題解決推進のために、ふたつのPTとJACの財務改善と組織全体を見直すチームを新たに設けました。ふたつのPTは、災害復興支援事業PT、ルーム検討PTです。もうひとつのチームというのは、財政の健全化と組織全般の見直しを図るということで、理事会そのものが全体で責任を持って対処しようという大きな目的を掲げた組織の編成です。これらをキャッチコピー風に申し上げますと、6Pプラスワンです。そのなかの災害復興支援PTは、その目的を達成いたしましたので、このほど解散いたしました。従いまして今は、5Pプラスワンということになります。

新たに設置いたしましたルーム検討PTには、現在のルームの

欠陥を見直し、これからのJACにふさわしいルーム像を構築し、できれば近い将来新しいルームの入手を考えることをお願いしました。現在のルームは、建築物の構造上、室の使い勝手がすこぶる悪く不便をきたしていますし、室が廊下を隔てて分かれていることも使い勝手を悪くしています。また、一般のマンションですので、隣人への気遣いや気配りにも神経を使います。更には、ルーム使用の頻度が高く、思った日時に集会が開けないとの苦情も出ています。

むしろこうした使用状況よりも、もつと頭の痛い問題が生じています。それは、蔵書と資料の保管状態です。ご覧になっていただきますとお判りになりますが、図書室は、閲覧スペースまで本が専有しだし、もうこれ以上収納は不可能な状態です。また資料室も同じで、何から何まで一カ所に集められ、まるでがらくた倉庫です。JACの山関係の蔵書は、質、量ともに日本一ですし、資料室にも大変貴重な物品が多く収められています。このままでは、JACの貴重な資産の散逸も懸念されることから、これらの新しい収納ス

ペースの確保が急務です。つまり新ルームの入手ということになるのですが、更に申し上げますれば新しいルームは、クライミングやボルダリングのボードの設置が不可欠ですし、簡易の宿泊施設も設ける必要があります。言うまでもなく、若い人たちを引きつける魅力あるルームの建設です。

JACの再興は、会員の若返り以外に求められません。若い人たちの入会の促進と若者にアピールできる新しいJACの構築に取り組んでいるのがJACYOUTHPTです。正式に設置されて具体的に活動を始めてからおおよそ2年が経ちました。チームを構成する皆さまの努力で着々と成果を上げているのはご存知の通りです。平成21年から入会した20代、30代の会員は70名近くに達し、外部の若者への情報発信と各種机上講演会や現地山行講習会を通して確実にその成果を上げています。元来PTは、時間的なもので、ひとつの事業目的が達成された時点で解散されるものです。JACYOUTHPTも2年を経てやっとその目的のいわば橋頭堡を築いたわけでして、これを足がり

として大いなる目標の拠点としなければなりません。現時点での一応のJACYOUTHPTの役目は終えたと理解しています。新年度からは、JACYOUTHPTを発展解消させ、青年部、学生部、指導委員会を統合した新しい組織としてJACYOUTH CLUBを立ち上げたいと思っています。

JACYOUTHPTの努力によつて若い会員の核ができました。この核は何としても大切にしなければなりません。改めましたJACYOUTH CLUBはこの核が自己増殖するための受け皿です。いささか過激な発言になりますが、若い会員たちだけで集う組織ができてよいのではないのでしょうか。YOUTH CLUBを自主運営してもらってもよいのではないのでしょうか。

幸い今のJACには、年輩者の知恵とまだ財力に余力があります。今こそ知恵をしぼり、若者に投資する絶好の機会が訪れたと申し上げられましょう。ぜひ会員の皆さま方のご理解を賜りたいと思います。

会長特別表賞記念寄稿

富士山に生かされ、登れる喜び

実川欣伸

京浜工業地帯に生まれ、遠く富士山を眺めて育った子どものころから、自然のなかを歩くのが好きだった。沼津に移住し、富士、箱根、伊豆の山々を家族で登ったことがある。中国からの研修生が富士山に登りたいというので、年に5〜6回案内した。それが縁で私は富士登山の虜になった。

1993年、四登山道が続けて登る「一筆登山」を31時間で完歩。下山時、双子山が遠くに飛んでいたり、もどってきたり、五合目の駐車場も目の前に飛んできたり、いったりする幻覚を見た。

2002年、伊豆・下田海岸から半島を縦断して、富士山頂まで38時間。そのときも日本ランド付近で木々にモクレンのような大きな白い花が咲いて見えたり、吐く息が顔の前に大きな雲のように浮かんでいたりした。下山時には、オンタデが雲海の上に大輪のキクの花のように咲き乱れ、その間に洋式の棺が浮いて見えたり、山小屋がビルのようにそびえて見え、

岩も大きな怪物になって動くなどの幻覚を見ている。

2011年6月、日本一低い天保山から東海道を480^{キロ}歩いて富士山に登った。6月9日から8日間で登ったので、1日60^{キロ}以上、睡眠時間4〜5時間、大雨の鈴鹿峠越えで足がふやけ、靴擦れや足にタコができたりした。片足5〜6カ所の負傷で痛みに耐えながら歩き続けた。

14日夜は、静岡丸子宿の静岡支部の仲間の家に泊めてもらい、15日4時に出発。そのまま寝ずに歩き続け、16日3時ころ、スカイライン西臼塚付近で、疲労と睡眠不足から真つ暗な道を右に左によりめきながら歩く。すると私の前を前屈で力強く歩く男の姿が現われた。よく見ると私の後ろ姿だった。

しかし、夜明けとともに遊体離脱現象は消えた。水をずっと飲んでいないので、ペットボトルをもらって歩き続けると、今までの疲れた体がうそのように治った。五合目3時間はかかることを2時

間で歩き、待っていた仲間たちと合流、登頂できた。人間の気力とはすごいと思ったものだ。

5年前の08年、年間248回登頂。1日2回登頂を75日間連続、1〜2回登頂を88日間連続、2回登頂109日間達成した。09年203回、10年205回、11年201回と、4年連続200回、857登頂を達成した。

昨年始めは震災による通行止めが6月2日まで続き、またモンゴルや秋には岩手の山にも行っていたので、日程的に厳しくなった。11月に入ると、10日以降は20^{メートル}以上の強風が続いた。

11月23日、最後の登山も午前中は強風、午後は吹雪で、予報では30^{メートル}以上の風だという。行けるところまで行こうと、突風に細心の注意を払いながら登る。無事登頂、仲間もあとから登ってきた。記念写真を撮り、奥宮に無事登頂のお礼と更なる登頂達成を祈願して下山、五合目まで吹雪で真つ白だった。

富士山に登り始めて26年、1212回登頂という記録を達成できたのも、富士山で会う多くの登山者の方たちのおかげであると思

う。シーズン中は別として、オフの2登頂は、毎日、最後の登山者になる確立が高く、危険である。それでも登り下りで会う登山者に励まされ、勇気をもらって無事下山している。

富士山からは、夜明けから毎日繰り返される大自然のドラマや、まだ見たことのない森羅万象、未知との遭遇を楽しみにしている。富士山に登ってよいと許してくれるかぎり、私はこれからも登り続けたいと思っている。

『山』800号記念

井戸を掘った者を忘れず——800号に寄せて

南川金一

本紙の紙齢が800号になるという。現編集者の神長氏ならびに歴代の編集者のご苦労に心から敬意を表したい。ご苦労というのは、突然の指名に戸惑うものの時間は待ってくれない。その気苦労は並み大抵ではなく、多くの場合、本職の合間の時間を使い、時には本職をさておいても優先させなければならぬ。

人名・固有名詞は当然のこととして、山岳会の機関紙であるから、山の名前・標高は特に正確を期さなければならないが、「剣岳」と「剣岳」が混乱していた時代には悩まされたはずである。誰にも勘違いはあるもので、送られてきた原稿に間違いがないとは限らない。登山記録や紀行文の場合には、地形図と照らしあわせて、右岸、左岸、方角が正しいかどうかのチェックも必要となる。新聞社のような大きな組織では校閲の専門家がいますが、趣味の会ではそんなことは望むべくもなく、すべてが編集者にかかってくる。オール

マイティな編集者などいるわけはないのだが、時としてそれを求められるのが辛い。本職が忙しい時には、余技にまで集中力が及ばず、そのような時に限ってミスが出てしまう。その悔しさ・苦い思いは経験者でなければ分からないだろう。私は、『山岳』の編集に15年、『百年史』の編纂に10年余と会務にかかわったので、編集者の気苦労はよく分かる。

私の手元には創刊以来の会報がそろっており、60センチ幅の書棚の1段を占めている。200号までは、創立70周年記念事業として大修館から出版された復刻版である。会費納入の証しとして、第三种郵便で送られてきた折れ目のついた会報は466号以降であるから、2001号以降、465号までは別途蒐集した訳であるが、それにはかなり苦労があった。欠番があり、何号分かはコピーで補っている。創刊以来の会報をそろえて持っている会員は極めて少なく、おそらく5指にも満たないであろう。

う。お陰で百年史の編纂にあたっては随分と重宝した。事あるごとに会報の合本を繙いて会の歴史を調べたが、その回数は何千回にも及ぶだろう。

機関紙というものは、そのときに役に立つだけでなく、後日、資料として役立つという重要な使命がある。古い会報を開くたびに、奥付にある編集者の名前を確かめて苦労を偲んだ。苦労を偲び、それを役立てることこそが先人の労苦に報いることだと思う。「喝水不忘開井人」(水を飲んで井戸を掘った者を忘れず)である。

初代編集者は浦松佐美太郎氏

1929(昭和4)年、会の集會室兼図書室が虎ノ門に開設されたのは画期的なことであった。それを機に、翌年、機関紙「会報」と『山日記』が相次いで刊行され、会は新たな高揚期を迎えた。創立25周年の年であった。

創刊号はB5判、6ページ建てで、5段組みの最上段を題字に当て、題字中央に挿入した会章と、輪郭・中段を茶色にして2色刷りにするという贅沢で洒落た体裁だった。「第1号は先ず見本のつもりで編

輯しました」と、編集者の浦松佐美太郎氏が編集後記に控え目に書いている。

150号に藤島敏男氏が「会報」の発行に至った裏話を書いている。「会報が誕生したのは、昭和5年10月で、その年の7月に本会理事に選任された浦松佐美太郎氏が、9月の常例理事会の席上で、当時本会の刊行物としては機関誌『山岳』が年3回あるばかりで、これでは会と会員との連絡にも不十分であるし、会員の会に対する関心を喚起するためにもなにか別にもっと頻繁に会員の手許に届くものを出すべきだと提案し、浦松君が一切をイヤ応なしに押付けられ早速翌月から始まったのである」と。創刊号の編集後記は控え目だと前述したが、藤島氏の証言で合点がいく。当時、浦松氏は29歳、自分が言い出しついで始まったものであり、自信など表明できるはずがない。

9月の理事会で決まり、10月からスタートでは明らかに準備不足である。創刊号のトップは楨有恒氏で、その着眼は結構であったが、届いた原稿は600字程度で、題字下の1段を埋める分量にしか

らない。困ってしまったて、編集者本人が急遽穴埋めを書かなければならなくなってしまった(それは浦松氏らしいいい読みものであるが、基本的には編集者は黒子役に徹すべきもの)という事情が紙面から読み取れる。

『山岳』が7人の発起人の総力をあけての取り組みであったのと比べると多難な船出であった。しかし、会報は号を追って充実していった。今日その紙面を見て、何よりも驚くのは、そこに登場する豪華な顔ぶれである。登山史上に残る、影を踏むことさえも憚られるような顔ぶれが毎号のように登場し、それも編集者の「命令」で、もとより原稿料なしというところが山岳会の凄ところである。冒頭に編集者の気苦労について書いたが、編集者の苦勞を理解し、長老的会員といえども協力を惜しまなかったところが本会の伝統であり、それがあればこそ充実した会報が続いてきたのである。

戦後の復刊を担った塚本繁松氏

会報の発行を担った歴代の編集者で忘れてはならない人をあげれば、それは塚本繁松氏であろう。

戦中・戦後の困難な時に会を守り、戦後の会報の復刊を担った。虎ノ門の会室は空襲で焼け、自宅も焼けて、自宅焼跡のテントと彼が背負って歩いていたりユックサツクのなかが会の事務所であった。望月達夫氏の文章を借りる。「戦後の第1号である133号が発行されたのは、昭和21年4月20日だったが、12頁の同紙をいま改めて手にするとき、焦土と化したなかから、これだけのものを作り上げた当時の関係者の異常な熱意に驚かざるを得ない」「あの困難な状況下で矢継ぎ早に会報を刊行した塚本の熱意と努力は尋常のものではなく……」。塚本氏は1947年、腸チフスで亡くなった。

索引作成への地道な努力

近年の編集者では小倉厚氏が印象に残るが、ここでは索引(目録)についてのみ述べる。本紙の50号ごとに索引(目録)がついてくる。過去の会報に載った記事を調べようとすれば、まず索引(目録)を調べるから、その有り難さがよく分かるとともに、作成のために費やされた時間・労力が半端でないことが分かる。小倉氏が

301号以降、700号までを作成したことは百年史に書いた。701号〜750号の目録の編集後記に、小倉氏からの電話で「目録作成は733号まで進んでいるが、末期性のガンがみつかつて、もうできません」との内容だったと神長氏が書いている。死の直前まで気にかけて、作業を進めていたとは頭が下がる。

それにつけても思うのだが、そうした地味に会務にかかわっている会員の苦勞が真つ当に評価されているだろうか。それは、名誉会員にしろとか、会長表彰をしろとか、そんなことをいうのではない。また、死後に花環や立派な弔辞があったとしても、死んだ者にはかわりのないこと。生きている間に、その仕事に評価を与えるということがある。「目録はいつも便利に使わせてもらっているよ」のひとつ言があればよい。「猫に小判」で、価値が分らないというのは最も始末が悪い。

歴史と伝統に学ぶことから

日本山岳会の誇るべき伝統は何かといえば、山登りを文化として位置づけ、文化としての山登り

を追求してきたことである。日本山岳会の魅力、それは世間から見れば狂気とも思えるような山狂いの集まりではあるが、文化として山に登り、その結果として珍しく新しい山の情報が豊富に集まっており、その情報が機関誌・紙に溢れており、会の集まりではそうした人たちが席を同じくすることができることであった。近ごろそうした魅力が失せてしまったのはどうしてであろうか。魅力や活力が失せてしまった会では、編集者がいくら努力してみたところで、魅力的な機関紙を作れるはずがない。個性的な優れた山登りをする会員、レベルの高い山の研究に打ち込む会員が多数いる会でなければ、会は輝かないし、機関紙も輝かない。

「温故知新」という。広辞苑には「昔のことを研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること」とある。打開策を模索するとするならば、創立以来の機関誌・紙を読んで歴史と伝統を考えてみることから始まる、と考える。『日本山岳会百年史』にはその扉を開ける鍵が収まっている。

『山』800号記念

思いがけない収穫

大森久雄

私が入会したのは1972年1月。日本山岳会の存在は重々承知していたが、敬して遠ざかる、という対応だった。それが図書室を利用したくて恐る恐る入会した後のある日、山崎安治さんから、会報の編集をやってくれといわれ、本業が超多忙だから再三断つたのだが押し切られてしまった。会報編集集をやっていたその山崎さん自身、「渡辺公平さんにつかまったのが運のつき」と述懐している(『山』400号)。事情は会報編集担当の大方が同じであろう。担当は1975年5月(359)号からで、入会後3年ほどだから会の内情も雰囲気も飲み込めないままやることになった。その頃のこととは450号に書いたが、まず7ポイント、5段組という虫眼鏡がほしい詰まり方の誌面を明るくすることにした。9ポイント・4段という、いまのに近い組み方を考えて山崎さんに相談したら、いきなりそこまでやるな、爺さまたちが腰を抜かすから、ということ、5段組でも文字を大きく、ゆ

とりのある組み方にした。

当時の会長は今西錦司さんで、理事会に出たらその巨人が目の前にいるので緊張したが、担当最初の5月号が出た後の理事会では、誤植がなくなつたな、と言われてほつとした(その号には今西さんの「四等三角点」が載っている)。今西さんの次の会長は西堀栄三郎さんで、西高東低だと思つたが、理事会ではご両所の采配のふりかたや個性の違いがわかつて、とても興味深かった。得難い経験で、思いがけない収穫だった。

雑多な記事が入つてきて整理に困り、1978年4月(394)号から「東西南北」というコラムをつくつて処理したが、それが成長して健在なのはうれしい。記録されなかったことはなかったのと同じ、という。頼んだ原稿がこなかつたこともあるが、辻莊一さんのように、散歩の経路の延長だから原稿は君の家の郵便受けに入れておくよ、と電話をくださつた方もいる。山崎さんも書いていたが、会報のバックナンバーを見ていると興味津津、宝の山。第一級の資料がたくさんある。近年の会報は内容充実・体裁もみご

とで、三十数年前とは雲泥の差だが、会報は資料価値という世界を大切にしてゆきたい。

会報にも確固とした価値観を

岡澤祐吉

会報の方針は、会報編集委員会の総意で決まった。おおむね会の動きがそのまま記事に現われるよう努力した。会報編集委員には会の動きだけでなく、編集面でも経験豊富なメンバーがそろつており、さまざまな問題を無難に処理できたと思う。

チョモランマ登頂成功祝賀会に、当時の大平首相が出席して祝辞を述べてくれた。そのときの祝辞を原稿にした覚えがある。登山関係者としては嬉しい思い出。皇太子殿下が入会されたときも、確かそのときのことを編集委員の1人が取材し、年次晩餐会の記事で報告した。また秩父宮殿下がスイスの山岳ガイドの手帳に残された所感文を会報に載せたとき、これを昭和天皇がご覧になったとの報告を受けた。今上天皇が日本山岳会の会報を手になされたという話は聞いたことがない。これが嚆矢となるだろう。

当時、会費に見合う会員サービスということ、会報『山』の使命を強く感じた。担当していたころはチョモランマ遠征など海外登山の話題に事欠かなかったのは幸いだった。会員に寄稿をお願いする場合、その内容が読む側の会員に喜んでもらえるか検討し、時には専門家に助言をもらうこともあった。編集者が顔を出せるのは編集後記だけの制約もあり、忸怩たる思いを持つこともしばしばあった。

トニ・ヒーベラー編集のレキシコンに「月にある山」が掲げてあった。日本の科学雑誌にも、火星にはエベレストより高い山があるとあった。日本山岳会会員で宇宙飛行士となり、月にある山に一番乗り、ということでもあれば、会報も中身が増すような気さえする。私自身、35年間スイス山岳会会員でもあるので、『ディ・アルペン』や、AACB年報を見る機会が多いが、スイス国内でも登山風潮に変化があるのを感じる。しかし『ディ・アルペン』がプライドのある専門誌であることを自覚し、今でもマスコミに影響を与えていると自負しているようである。会

報『山』にも動じることのない価値観をとお願いしたい。

編集はプラス志向で

村井 葵

縁あって1997年7月(626)号から世紀をまたいで2001年6月(673)号まで編集人をやらせていただいた。齋藤惇生会長と大塚博美会長の時代です。小倉茂暉さんはじめ、多くの編集委員のスタッフに助けられ、特に編集作業は奈良原町子さんの卓越した能力がたよりでした。

浦松佐美太郎さんの古典『たった一人の山』は、中学生のころ読んだ愛読書でした。訳書のウインパールの『アルプス登攀記』にも影響を受けてマッターホルンやモン・ブランを登りにいったものです。日本山岳会の会報は29歳の浦松さんの提案で発行されたもので、尊敬する大先輩につながる編集作業は緊張とともに高揚せざるを得ませんでした。私が編集中に1930年創刊の『山』は古希を迎えました。

山岳会を活性化し会員に満足してもらうために、毎号、特に巻頭文には神経を遣いました。タイ

ム・リミットと闘い、大先輩や仲間にも助けられました。編集はあくまでもプラス思考でのぞみ、若者に創造する能力、冒険するチャレンジ精神を培養するように努めました。当時はビッグ・クライムが何回か試みられ、成功があり、失敗もありました。それに江本嘉伸さんの『海外の山』は、入稿するのが毎号楽しみでした。また私の編集期間中に秩父宮記念山岳賞が創設され、山岳会創立100周年に、高頭式の『日本山嶽志』にちなんだ『新日本山岳誌』が出版されたのも、いい思い出です。

現在、世界中の高峰がハイキングのようになり、エベレストでさえオリンピックの聖火が頂を越え、テレビカメラとともに登頂する時代になりました。これからの若者は、なにを目標にすべきか大いに議論すべきでしょう。

最近の会報を見ると、『山の日』をつくらう運動が盛んなようです。全国的な盛り上がりが見込め、山が見直されるきっかけになると思います。健全な山があればこそ、豊かな海につながります。『山の日』を祝うことは、人類の未来のために地球を安定させる大

きな目的があるのです。

700号のカラー記念号

今村千秋

私が会報を担当したのは、2001年から2005年までの4年間である。当時の登山界の動きは未踏峰がほとんどなくなり、困難なルートへの登攀が盛んに行なわれていた時代であった。前任者からの引継ぎで「会報は本部と会員を直接繋ぐ重要な伝達手段である」と教えられて取り組んだ。

編集にあたっては、山登りの会の会報であり、巻頭の原稿は「極力海外の登山活動の報告」とする方針をたてた。また掲載する原稿、投稿も登山活動を優先させていた。実際の実務である「割付け」などは、ベテランの亡き奈良原町子さんに全面的にお願いしていた。会員数は6000名を一時に越えた時期で、将来の日本山岳会の在り方、方向性について理事会で熱い議論を行なっていた。また会報でも辛口のご意見を多くの方にお願ひして、連続で取り上げたときもあった。現在と違って財政的にも豊かだったような気がする。

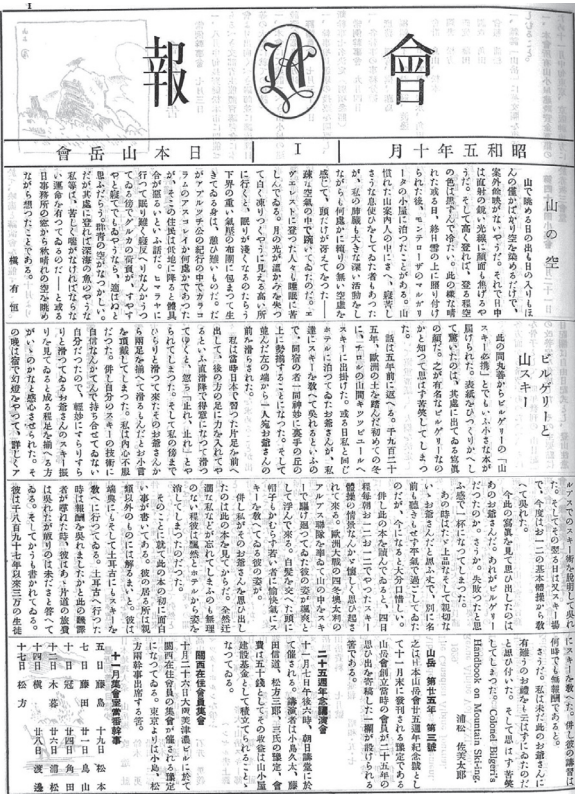
在任中の2003年の9月号が「700号の記念号」となることから会報のカラー化を企画した。予算面の問題をクリアして作業に入ったが、表紙の「山」の字の色はどうするのか。原稿と写真は、など初めてのことで大変だった。特に広告を掲載されている会社の方に説明し、カラーのゲラをいただくのに時間がかかった。印刷の双陽社の方とも数回の打ち合わせ、チェックを行ない発行にこぎつけた。受け取った会員の方からは「驚いた」「素晴らしい」「今後カラーなのか」などのお手紙などを多数いただき、やってよかったと自己満足に浸った思い出である。ただ1人だけ「水に濡れたら紙がくっついた」とのクレームもあったが……。

編集していて思ったのは、カタカナ表記の山の名前、地名、それに標高など数字が多いので、現在の縦書きを横書きに変えてはどうかという点だ。紙の大きさを変え、ることには合本などをなさる方の反対が大きかったが、サイズが同じなら可能で、会員の方も読みやすいのではないか、と思っている。

『山』800号記念 歴史と伝統に裏づけられた日本山岳会の『山』

「今后毎月此の会報を発行することになりました。之を発行する第一の主旨は、毎月の会務並に会的情勢を会員に報告することにあります。年に三回の山岳では兎角疎遠になり勝ちな会と会員の連絡を、此の毎月の会報で結んでゆく事が出来れば大成功でせう。其他に此の会報に果させ度い大事な役目は、其折々の山の知らせや登山界の情勢であります。会員諸兄の殊に地方在住の方々の御助力を仰げれば大変に幸です」浦松佐美太郎

冒頭に引用させていただいたのは、会報1号に書かれた浦松佐美太郎氏の「編集後記」である。1930年10月、日本山岳会創立25周年の記念の年に、機関誌「会報」は創刊された。その創刊の辞が冒頭の言葉で、控えめながらも「会報」編集にかける思いが素直に綴られている。誌面の関係で判読できないのが残念であるが、B5判の表紙を掲載したので、その格調高い雰囲気だけでも感じ取っていただければと思う。



「会報」の成り立ちやその内容については、愛情のこもった言葉で南川金一氏に綴っていた。また生存されている先輩担当の方たちに、編集の喜びと労苦を語っていただいた。さきやかではあるが、『山』800号記念としてページを組んでみた。

それにつけても思うのは、同時に掲載させていただいた歴代担当者の方たちの顔ぶれである。1930年1号から始まるその方たちは、まさにきら星のごときお名前が続き、これが山岳会の歴史と伝統なのだと思ふ。『会報』という機関誌の性格上、いくつかの制約は受けざるを得ないが、それでも「人」が息づいている伝統は決して揺らぐことがないかのようなものである。それが、日本山岳会の力なのではないだろうか。

(神長幹雄)

奥付の記載による

発行年	号数	担当編集者	発行年	号数	担当編集者
1930年～1931年	1～11	浦松佐美太郎	1950年～1951年	151～155	望月達夫
1932年	12～21	角田吉夫	1951年～1952年	156～161	織内信彦
1933年	22～24	額田 敏	1952年～1955年	162～180	渡辺公平
1934年	25～31	角田吉夫・額田 敏	1955年～1960年	181～209	山崎安治
1934年～1935年	32～36	額田 敏・福島昌夫	1960年～1965年	210～239	古沢 肇
1936年	37～52	額田 敏・逸見真雄	1965年～1968年	240～275	吉沢一郎
1937年	53～62	松方三郎・逸見真雄	1968年～1972年	276～323	山崎安治
1937年	63～68	中屋健之・中司文夫	1972年～1973年	324～334	坂下心一
1937年～1938年	69	角田吉夫・中司文夫	1973年	335～340	春田俊郎
1938年～1939年	70～74	角田吉夫	1973年～1975年	341～358	山崎安治
1939年～1940年	75～84	吉沢一郎	1975年～1979年	359～407	大森久雄
1940年～1941年	85～93	石原 巖	1979年～1983年	408～455	岡澤祐吉
1941年～1942年	94～108	望月達夫・塚本繁松	1983年～1984年	456～465	皆川完一
1942年～1944年	109	塚本繁松	1984年～1989年	466～528	岡澤祐吉
1945年	110～118	吉阪隆正・塚本繁松	1989年～1993年	529～577	小倉 厚
1946年	119	塚本繁松	1993年～1997年	578～625	伊藤 敏
1946年～1950年	120～132	田辺主計・塚本繁松	1997年～2001年	626～673	村井 葵
	なし		2001年～2005年	674～722	今村千秋
	133～136	塚本繁松	2005年～2012年	723～800	神長幹雄
	137～150	記載なし			

イベント

井上靖『氷壁』とその時代——ナイロンザイル切断事件と「カエル会」の交流

関塚貞亨

緑爽会は、2011年11月19日、56年前のナイロンザイル切断事故、事件をモデルとした井上靖の小説『氷壁』の成立について、経緯を知る石原國利会員と近藤信行会員を招き、対談を行なった。石原氏は事件の当事者で九州在住、東海支部に在籍し、近藤氏は事件と小説、山岳会との関係を熟知している。当日は雨天にもかかわらず山岳会の104号室は満員となった。

事件は、1955年1月2日、石岡繁雄が主宰する岩稜会の若手3人による前穂東壁の登攀中に頂上直下で起きた。厳冬期初登攀を目指していたパーティのトップを登っていた若山五朗が、わずかに滑落しただけでザイルが切断、墜死したのである。若山は岩稜会会長石岡の実弟で19歳であった。

ナイロンザイルは1950年のフランス隊がアンナプルナー峰登頂で採用、高所・寒冷時では麻ザイルより柔軟で扱いやすく、数倍丈夫であると考え、世界の登山

界に普及してきただけに、登山界はもちろん、ザイルメーカーにも衝撃を与えた。ザイル製造元のT製鋼は、関西支部長で大阪大学のS教授に依頼し公開実験を行なった。実験では麻ザイルは切れ、ナイロンザイルは切れなかった。山岳会も『山日記』1956年版にS氏のザイル安全論文を載せ、登山者にも「未熟をザイルのせいにした」と考える人もいた。この実験は、後に岩角に僅かに丸みを持たせていたことが判明する。

岩稜会の石岡会長は名古屋帝大卒の物理学の徒である。S氏による実験に欺瞞があるとして、独自の実験タワーを建設し、ナイロンザイルが摩擦熱によつて人の体重程度の加重でも切断する弱点を発見し、その結果を「ナイロンザイル切断事件」と題し冊子にまとめ、新聞、出版社に配布した。これを讀んだ長越（安川）茂雄から井上靖にわたり、山岳小説『氷壁』が生まれた。小説が再びザイルの

切断事件を注目させ、また石岡は1973年に登山者、消防署員などを招いて公開実験を行なったので立場は逆転、関係者の名譽は回復され、現在のより安全なザイル製造のきっかけとなる。そして『山日記』も訂正記事を書いた。

対談者の近藤氏は事件当時、中央公論社に在籍、井上靖が同時期に書き進めていた『天平の甍』を担当、また同社から刊行された深田久弥の『ヒマラヤ 山と人』の編集者であった。井上靖は小説のモデルとなる人の話を丁寧詳細に聞き、その現場をじっくりと見て構想を練る人で、『氷壁』の中で、深田久弥のヒマラヤ本から「デューブラの詩」を引用する許可を取るために深田邸を訪問する、実直な人であった。

小説『氷壁』でも、長越、石岡、石原三氏を大井滝町の自宅に招き、詳細に話を聞いた。学生だった石原氏への対応も丁寧で、小説原稿まで確認を求めたなど、石原氏は深く尊敬するようになった。井上靖も石原氏の人柄を好み、たびたび井上邸に招かれ、ときに懇談が夜更けに及んだこと、夕食に招かれたこともあったという。

井上靖は『氷壁』の舞台であった穂高岳が気に入る、長越、近藤、石原氏ら親しい人たちと毎年10月の涸沢を訪れるようになった。そのグループは小説の一場面から「カエル会」と名づけられ、アフガニスタン、ネパールの旅まで広がってゆく。また「カエル会」には山本健吉、東山魁夷、生沢朗も加わって、石原氏はその深い知性に触れたことは一生の宝になった、という。石原氏は81歳、半世紀以上前の出来事を静かに語る。それだけに友を失った痛恨の思いが聴くものの心に響いた。

エンサイクロペディア

『三省堂日本山名事典』の改訂版を出版

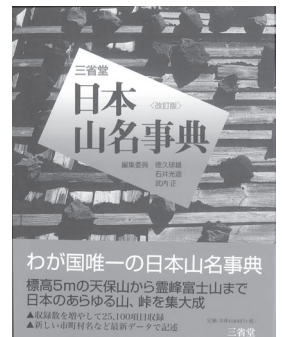
金井弘夫

本書は国土地理院2・5万図に記録されたすべての山名と峠名および山と関わりのある地名を、漢字綴り、読み、高度、所在地、最寄り駅からの方角と距離、簡潔な解説、所載地図名、経緯度(秒単位)を付して、読み順に配列したもので、約2万5100件の地名が集録されている。徳久球雄、石井光造、武内正編によるもので、山の愛好者ばかりでなく、広く民俗、歴史、地名に関心を持つ者にとって、大変有用な事典である。

初版は2004年に刊行されたが、その後全国的な市町村合併と行政区画名の変更・新称が行なわれたうえ、世界測地系の導入による国土地理院地図の新図式の2・5万図の刊行が始まった。これを受けて、すべてのデータを見直し、とくに市町村名、経緯度などが改訂されている。と簡単に言っても、2万余件をいちいち当てるのだから、誰にもできるようなことではない。とくに経緯度は、いちいち図上で計測したとある。

神経をすり減らす作業だったことだろう。駅からの方角や距離も、鉄道の新設や改廃で、見直しが必要だったと思う。私もかつて、「駅の名所案内板を全部集めたら有用だ」と思ったものの、やり方を思いつかないまま棚上げとなっていた。

項目数は初版の約2万5000件に約200件を追加し、開発等により平地化されたものは削除したと記されていて、「そこまで目配りをしたのか」と驚かされる。本体のページ数は初版が1111ページ、改訂版が1113ページでほとんど変わりはなく、ページ当たりの項目数も同様だが、子細に見ると上記の主な改訂箇所のほか、解説にも多少とも手が加えられている。市町村合併で、一つの山に係わる行政区画の数が減った分、そういう余地ができたのだろう。再検討の結果、見出しとしての地名の読みが改められたものもあり、例えば顔振峠は「こうぶりとうげ(かあぶりとうげ)」から「かあ



2011年8月、三省堂刊

ぶりとうげ(こうぶりとうげ)」に変わっている。解説文は同じなので、これは初版の校正の見落としというところか。もちろん「こうぶりとうげ」の見出しもある。地名よみは、国土地理院採用のものほか、現地呼び方も考慮したとのことで、複数あればそれらも取り込まれている。長野県の「はくばさん」(白馬山)や「とくもととうげ」(徳本峠)は、地元の人々がそう呼ぶのを聞いたことがあるが、まだ資格がないようだ。

巻頭に日本の活火山一覧(地図つき)と、日本の山地山脈の区分・名称の図がある。付録には、山名の由来、アイヌ語源の山、雪形(山、同名の山、色の山、十二支の山、低い山、深田久弥「日本百名山」、富士山、自然公園と山、があり、山行計画を立てたり、趣味の作品の種を拾ったりするのに役立つだろう。最後に山名の画引き索引が

ある。

刊行直前に東日本大震災が起こった結果、本書の対象となる山や峠の位置は、全国的に不規則なズレが生じたはずだし、今後の復興事業で消失する山もあることだろう。そういう結果が地図に表記されるまでには、少なからぬ年月を要するに違いない。人の寿命には限りがある。出版社は、末永くこの事業を継続してもらいたい。そしてユーザーは、旧版を保存し続けてもらいたい。この種の事典は、新版が出れば旧版はゴミ箱行きという代物ではない。それは地層の一枚として残さねばならないもので、それがあることによつて、われわれの歴史を遡ることができるのだ。

電子記録は使い勝手という点では便利なものではあるが、いつ失われるかわからないし、改ざんされてもわからない。紙の上の文字ならば、たとえ日本語がなくなっても、われわれの文化を物語ってくれる。だからできるならば過去にさかのぼって、たとえば明治時代の5万図を対象に、こういう事典を作ることにも考える必要がある。

ミュージアム

メスナーのプロジェクト最後の山岳博物館

岡澤祐吉

リカルド・カシンが亡くなった時も、エアハルト・ロレタンが墜死した時も『ディ・アルペン』（スイス山岳会会報）は死亡記事を載せていたが、このところラインホルト・メスナーについての記事が載ることはほとんどなかった。ところが最近、「これが最後」と銘打ったメスナーの山岳博物館プロジェクト5番目の「リパ（イタリア語で河岸の崖）」についての記事が載った。レポートするライトナーがイタリア・ボルツァーノ在住の会員のせい、メスナー寄りの記述ではあったが、日本国内で過疎化に嘆く身近な山村をしばしば目にする私としては、考えさせられる部分もあったので紹介することにした。

これまでメスナーは、自分の関係した山登りも含め、集めたさまざまなものをテーマごとにまとめ既存の4つの山岳博物館に展示してきた。メスナー自身、前人未到の8000⁺峰14座をすべて無酸素で登るなど、クラシックな登山

をやる者には目を見張るような実績を上げてきた。しかし、彼なりの独特なやり方で登山実績を公表したのがマイナスに働き、特にドイツ国内では裁判まで起こされ敗訴もした。メスナーはこれに反発し、覆そうともした。今でもその気持ちは強いようだが、ドイツ語圏に住む支援者のなかにメスナーを弁護して再審裁判を起こし、ドイツ国内でのメスナーの名譽を挽回してやろうとする動きはみえない。メスナーの運営する既存の博物館も、南チロールというイタリア国内のドイツ語圏という狭い範囲のことなので、博物館入館者も思ったほど伸びないのかもしれない。

今回、5番目の開館となった山岳博物館「リパ」は、メスナーがこの計画に没頭していた15年間、中止を考えざるを得ない状況もあり、酷評も受けた。彼はそれに堪えてこの博物館完成にこぎつけたのだという。自分が訴えようとするもの、それを理解してくれるよ

うなプロジェクト最後の山岳博物館を完成したことで、メスナーは名誉挽回したとの自覚も持ったらしいと、レポートのライトナーは述べている。

今回の博物館のテーマは山ではなく、メスナーが育ったような山麓で暮らす山地住民とのことだ。メスナー自身に言わせると「そこで成長した自分はこの環境のなかでさまざまなことを学んだ、それは世界中の山地住民を理解する上でも役に立った」という。彼が育ったフィルネス谷は貧しい土地で、その土地がある南チロール自体、第一次世界大戦の敗北でオーストリアはこの地域を惜しげもなくイタリアに割譲した。狭くて観光資源以外何もないような貧しい地域である。メスナーがこれまでにつくった博物館は、すべてそのような南チロール地域にあり、彼の育ったフィルネス谷を中心に東西それぞれ50^キ、全長約100^キの範囲に散らばっている。今でこそ観光地として知られるチロール地方だが、博物館のある場所にしても詳しい地図がなければ容易に見つけられない。

30年ほど前、私はメスナーに

会うため彼の住むフィルネスを訪ねたことがある。その時のことは会報『山』にレポートしたのでご存じの方もあるだろう。インスブルックから乗ったローカル列車でブレンナー峠をくぐり、北イタリアのヴェローナに向かった。クラウゼンという、本数の少ないローカル線しか止まらない、駅舎らしい建物もない小さな駅で降りたときのことである。

（次回へつづく）

N 東 西 南 北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

中国・四川大地震

祖父川精治

2008年5月12日、四川省汶川県の龍門山周辺でマグニチュード8・0の直下型地震が発生した。北京オリンピック開催まで僅か3カ月前のことである。重大な被害を受けた地域は、わが国の面積の3分の1に匹敵し、死者行方不明は約8万7000人と伝えられている。国力を結集して復興に当たり、この大災害を乗り越え、夏の北京オリンピックを開催した。

私たちは同月22日、北京から山西省の五台山へ登っている。3000級の5つの峰々が連なる山岳仏教の聖地である。臥龍のパンダ保護センターや、生息する野生のパンダも多数被害を受けたといわれている。

報道によると地震直前、各地ではヒキガエルが不可思議な集団異常行動をとったという。交通量の多い地上の道路へ、池・沼や土中に生息するカエル達が数万数十万匹も姿を現わした。天災の前触れである前兆行動ではないかと噂された。四川大地震では、主に中小学校などの公共的建物の崩壊が激しかった。設計施工等建設上の問題ともいわれ、名づけて「豆腐のオカラ建築」と住民たちは酷評した。その後、崩落した建物や廃墟となった街並みを震災公園として保存するという動きもある。

河北省唐山市ではM7・8の直下型地震が発生している。今世紀最大級ともいわれた重工業都市の唐山大地震。今から35年前の1976年7月28日午前3時42分、未曾有の大災害で死者24万3000人の大地震が襲ったのである。しかし、各国からの救援を断わり自力再生の道を選んだ

という。

それを「唐山大地震」と題して、中国ではなんと最近になって映画化に成功したのである。記録破りの大ヒットで最高傑作といわれ、海外メディアからも「最もヒューマニズムと情感に富んだ力作」と絶賛された。運命のドラマに2000万人が涙を流したと伝えられる。

しかし、わが国では3月下旬から全国ロードショーとして上映される直前に、大災害が発生した。当然のことながら急遽取り止めとなり、今後の予定は不明である。

谷川岳の馬場保男さん

南島明典

昨年11月3日をもって、谷川岳肩の小屋の管理人をしていた馬場保男さんが辞めて山を下りました。以前に日本山岳会で講演をして下さった方です。谷川岳山岳警備隊、肩の小屋管理人と、谷川岳に45年を費やし、谷川岳の登山道の整備や登山者の安全をサポートしてこられました。

私は、7年前に病気になった

のを契機に毎年5月の連休日に谷川岳に登ります。肩の小屋に一晚泊してもらい、ほかの登山者も含め馬場さんと一緒に夜遅くまで語り合いお酒を飲むのが楽しみでした。がっちりした体格に似合わず繊細な神経の持ち主で、それでいて山に対する心意気は厳しい人です。山を甘く見ていようものなら、毅然とした態度と口調で戒められました。それでいて、出されるコーヒーと料理の旨さは格別でした。

長い間にわたり谷川岳を愛し、谷川岳の隅から隅まで知り尽くし、谷川岳の発展のために人生を捧げてきた馬場さんの労をねぎらう反面、私の心には一抹の寂しさが残ります。大登山家であつても決して威張らない、いつも控えめな人間性、人間として私の尊敬できる人です。管理人は辞めても谷川岳の発展のために頑張りたいとおっしゃっていました。これから機会を見つけて一登山者として一緒に山登りをしたいともおっしゃいました。

馬場さん、長い間ご苦労さまでした。ありがとう。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集委員会

年次晩餐会記念山行

年次晩餐会の翌日、平成23年12月4日は快晴。品川駅の中央改札口から集委員会が案内して下さり、集合場所を探して行くには不確かだったので大変助かった。

尾上会長はじめ百十名余りの参加者を乗せて、予定通りバスは7時出発、一路箱根に向かう。高速道路に入ると間もなく前方に富士山がくつきりと見えだした。昨日の激しい雨は、富士山に厚く雪の衣を着せてくれたようで、神々しく輝いている。小田原に入ると高速道側に見えるミカンがとても新鮮に映る。周囲に見とれている間もなく、順調に箱根園に到着。

静岡支部よりミカンをいただき、駒ヶ岳ロープウェーで出発。眼下に芦ノ湖を眺め標高差600mを7分で山頂駅に到着。風もな

く暖かい。北国から参加した私は寒さ対策だけはしっかりしていたので、すぐにシャツを脱いで出発した。

前方の駒ヶ岳山頂付近が草原状に見えるのは、ミヤマクマザサ。1350mの標高なので、強風のなかで育つ背丈の低い風衝植物とのこと。赤い鳥居を従えた駒ヶ岳神社にお参りする。ここは遮る物のない展望台で丹沢山塊、箱根外輪山から遠くに白く南アルプスの山々までスッキリと快晴の空に映えている。白雪の富士山は何者も寄せつけない風格で聳えている。相模湾、伊豆の大島まで見渡せ、海は穏やかに光っている。

駒ヶ岳神社前で記念撮影の後出発。100名を超える長蛇の列で、私が歩き出したとき、トップはロープウェー山頂駅下の下りに小さく見えていた。駒ヶ岳から一旦下り、ロープウェー山頂駅と交

差する沢沿いの道に入る。樹林帯のなかの歩道は扶けたように深い。今朝は冷えたのか小さな霜柱が少しだけあった。ひと息下った後、防ヶ沢分岐の十字路を過ぎると登りになる。ここで静岡支部差し入れのミカンをご馳走になったが、さすが本場の採りたての新鮮な味、元気をもらい、神山へ登り着いた。時刻は11時。

1438mの神山には一等三角点があり、測量用のICタグはしっかりと埋め込まれていた。「神山」という山名は、古代山岳信仰の聖地とされ高められた「神の住む山」が由来とか。山頂部も樹林帯のなかで展望はないが、少し下ると木陰から富士山が見える。この山全体を覆っている樹林帯は葉を落としているが、リョウブやナナカマドなど酸性土壤に強い低木の広葉樹だという。

大涌谷のバスへは2時までに降りるようというので、自由行動になった。少し早めの昼食をゆつくりとすませ下山にかかる。15分も下ると冠ヶ岳への分岐になる。祠の側を抜けて寄り道をする。この山は尖り山で山頂部も狭い。大きな神山を振り返り、すぐに戻

る。歩道は爆裂火口壁とか、急な下りで、目の前の富士山に見とれてばかりいられないほど足場はよくないが、丁寧に箱根の山を楽しみ、硫黄の臭う大涌谷に下山した。私の住む北国の日本海側はこの時期から陽差しが少ない。ひと冬分の日光浴をしたほどの好天で、終日、富士山に見とれた山行はもうろん、久しぶりにお会いした岳人との語り合いもあった往復のドライブにも満足した。

お世話下さいました集委員の皆さまに心よりお礼申し上げます。(福田光子)



12月4日、快晴の高尾山で



図書紹介

『語りかける山』

飯田年穂・著



2011年11月
駿河台出版
四六判 317頁
定価 2415円

『問いかける山』から10年ぶりに上梓された著者2冊目の山の本。明治大学教授である著者は比較文化が専攻で、フランスを中心とする西欧の近代文化・思想を研究、特に自然と人間の関係を主要テーマとしている。

フランスの大学に留学中、ヨーロッパ・アルプス登山の洗礼を受け、すっかりその魅力にはまった著者は、「登ってみると、なまの山の姿に接し山の声を聞くことができます。（略）その結果、山岳文化の研究にも、新たな視界が開けてくるのがわかりました」と述懐する。その新鮮な異文化体験

を綴ったのが前著で、その続編ともいえる本書は、2002年の月刊誌『岳人』の連載に補筆したもの。季節ごとに移りゆく山との語り合いをベースのモチーフに、エッセイ風にまとめられている。専門が比較文化であるだけに、その内容は、ヨーロッパと日本の山岳文化の違いを中心に、古今東西の文学作品や名文から人間と山との関わりを見つめていく。

「山から届けられる言葉が無限であるように、それに答える人の言葉もまた多様です。それが、山の文学の尽きせぬ豊かさをつくりだしています」と著者は記す。そんな山と人による言葉のキャッチボールに著者自身が参加し、心底楽しんでる様子が読み取れる。そして、いつの間にかわれわれ読者もまた、その語り合いに加えてもらっている気分になつてくるのである。

山好きは本好きである。たくさん山の頂を踏んできたように、同じくらい山の本を読破してきた山好きも多かるう。本書は、膨大なボリュームを誇る「山書の森」のなかから見事な銘木だけを選び分け、われわれ読者の目の前に並べてくれる。その本との出会いの状況によつては見えていなかったものも、本書をきっかけに見えてくることもあるだろう。そんな意味で、巻末の「著者・人物の紹介」と「取り上げた本のリスト」は、もう一度山の名著を読み返してみようという意欲を掻き立ててくれる。

（節田重節）

ロビン・ハンベリ＝テニソン・編著
植松靖夫・訳
『世界探検家列伝―海・河川・砂漠・そして宇宙へ』

ずつしり重い本書の英文題名は「ザ・グレイト・エクスプローラーズ」である。編者は40人の探検家を選び、7つの項目をたて、32人の執筆者が本文を書いている。探検家とは、尋常ならざる好奇心を持ち、巨大な未知の対象物に挑んでいく人たち。もちろん、不屈の勇氣、体力、知識もあわせ持つ、人並み外れた人たちのことをいうのだろう。また莫大な遠征資金を持っているか、あるいは調達できる能力を要求される。



2011年8月
悠書館刊
B5判 304頁
定価 9975円

未知の対象物は、海、陸地、河川、極地、砂漠、宇宙などである。残念ながら本書では山は対象外である。挿入されている多数の鮮やかな色彩図版や臨場感溢れる写真を見てのだけでも、興奮する。冒頭の「大海原」では、ヨーロッパ世界から新世界を見つけたコ

ロンプスから始まる。そして最後の「新次元の世界」では、人類が初めて地球から飛び出したガガーリンが登場する。宇宙飛行士を探検家と呼べるかという疑問は残るが、人類の前に今までとは異なる際限なき未知の空間が広げられたのである。

各項目にみると、「大海原」にはロンプスのほかにガマ、マゼラン、クックなど大航海者が、「陸地の探険」ではナイン・シン、ブルジェワルスキー、ヤングハズバンド、スタインなど。「河川」ではマッケンジー、スピーク(スピークとナイルの源流について論争したりチャード・バートンは前項に入っている)、リビングストン、スタンリーなど。「極地の氷を目指して」にはナンセン、アムンセン、ウオーリー・ハーバードなど。「砂漠へ」には(砂漠の女王)ことガートルド・ベルなど。「大地の生命」にはフンボルトやキングドーン・ヴオードなど。「新次元の世界へ」には前述のガガーリンのほか、潜水のクストー、地下洞窟のイーヴィスなどである。いずれもそうそうたる顔ぶれである。

参考文献には邦訳本も多数記

載されていて、もっと詳しく知ることが出来る。引用出典、図版出典一覧、索引もつけられていて親切である。本書には地図がついていない。そこで座右に『絵で見る世界探検地図』(同朋社出版)を置いてトレースすれば、なお興味が倍增する。(田村俊介)

『辺境の風景』

木崎甲子郎・著
木崎甲子郎画集



2011年10月
出版 舎Mugen刊
A4判変形 74頁
定価 2940円

木崎甲子郎氏は、1959年の南極越冬をかわきりに第二十二次観測隊長を務めるなど、数次にわたる南極の調査に参加した。また、ネパール・ヒマラヤの地殻変動調査プロジェクトを数年にわたり指揮した。琉球大学を退官後はトリブバン大学で地質学を講じ、チベットとタクラマカン砂漠の調査を行なつて、多くの著作で研究成果を発表してきたという、とことん地質鉱物学者である(巻末略歴参照)。

もともとフィールドの学者だから半世紀を超す研究、登山活動のなかでぼう大な量のスケッチをされていて、水彩による画文集『ネパールの旅 スケッチ集』を刊行されている(1990年)。キャンプ地や調査の途上で日記代わりに早描きしたもので、心休まる色調の水彩画集である。

70歳を過ぎてから、絵筆を持ちかえて、油絵に熱中しはじめた。那覇のアトリエにこもつて88歳までに描きためた風景と印象のなかから58点を選んだのがこの画集である。

木崎画伯にとつての「辺境」とは、ヒマラヤ、チベット、そして南極とタクラマカン砂漠である。画集は大きく3つのテーマ(地域別)に章だてされている。

水彩画時代の穏やかな色彩と安心できる画面構成とはうって変わつて、この作品集には大胆な画面作りと自由闊達な色使いで描かれた壮大な風景が散りばめられている。真昼の高峰や海に漂う水塊、雪に埋もれる観測基地の日暮れ、砂漠の乾いた植物などを、画家と学者の観察眼で表現している。

「辺境」に加えて「薄片」の章の

顕微鏡で覗いた氷と岩石の4作品は、地質鉱物学者ならではのモチーフで、鮮やかな色使いとフォルムが幻想世界へと誘う。木崎画伯は動物や点景人物のあしらいが巧みで、画面にライヴな感じを与え、私たちが未だ訪ねたことがない辺境への想像力と憧れをかきたてる。また、この画集はレイアウトと印刷、造本ともに申し分ない出来ばえで、作品群を引き立てている。

ただし、巻末に付された作品リスト(解説)は、各作品ともわずか3〜4行しかなく、残念である。木崎氏は爽やかで読みごたえある文章家としても定評の人だ。もう少し詳しい解説、制作動機や心象も書き加えてほしかった。

木崎氏は公募展でも入賞を果たしている実力派だし、50年余にわたるフィールドワークと登山体験者ならではの「辺境」風景の回想と想像力は尽きることがないだろう。また、88歳にして人並み外れた気力と元氣にあふれた人だから、これからも辺境を描き続けることだろう。続編の「辺境の風景」も期待したい。(松澤節夫)

会務報告

平成23年度第9回（12月度）理事会
議事録

日時 平成23年12月14日 19時より
21時20分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、吉永・西村

各副会長、高原・森・

小林各常務理事、野澤・

永田・萩原・節田・志賀・

古野・川瀬各理事、平井・

浜崎各監事、宮崎・橋

本各常任評議員

【委任】中山理事

審議に先立ち尾上会長から、先の年次晩餐会が盛会に開催できたことについて関係者に対する労いの言葉と東宮にお礼に伺った際、皇太子殿下の謝意が侍従から伝えられた。また、間もなく迎える平成24年もわれわれが抱える諸問題に引き続き肅々と取り組んでいきたい。皆のご支援、ご協力をお願いしたいとのあいさつがあった。

【審議事項】

1・定款施行細則について（高原）

役員および評議員の任期、役員の定年制、終身会員制度、会員資格復活について審議が行なわれた。タイムリミットもあり、次回理事会で結論を出すこととなった。（継続審議）

2・首都近郊支部の支部運営交付金について（小林・高原）

12月3日開催の支部長会議での問題提起を受け鋭意検討の結果、首都近郊支部以外の支部と同様に来年度から取り扱う。（承認）

3・四国支部設立について（高原）

関西支部との調整を完了させた旨、及び設立以後1年以上の事業計画及び予算書を理事会へ報告することを条件に承認する。（条件付承認）

4・「理事および監事の報酬に関する規程」（案）について（高原）
原案通り承認。ただし、来年3

月開催（予定）の総会に付議し承認を得ることを要する。（承認）

5・JAC YOUTHの今後について（森・野澤・古野）

21年以降JAC YOUTH P T発足後の活動の結果、65名（40歳未満）の入会者があり一定の成果をあげて、その活動体制も整備・構築されてきた。

今後この活動を安定的かつ恒久的なものとして強力に推進するため、「指導委員会」、「青年部委員会」、「学生部指導委員会」を統合し、委員会と同等の組織位置づけに編成（組織名YOUTH CLUB 仮称）して、既存の3委員会との連携、協調体制を敷いて活動し、JACの活性化を図る。なお、予算関係は一本化する。本取り扱いは平成24年度からとする。

YOUTH CLUB

指導委員会
—— 青年部委員会
—— 学生部指導委員会

（承認）

6・入会希望者について（高原）

11名の入会希望者があった。

（承認）

【報告事項】

1・各プロジェクト報告

①山の日制定PT（西村・萩原）

11月20日、岳都松本市で「山岳フォーラム」が、1000人を超える聴衆の中開催された（松本市など11団体主催）。種々のイベントの他、パネルディスカッションのなかで、PTの成川リーダーが「山の日制定」について強くアピールした。

②新法人移行PT（吉永）

新法人移行申請後の公益認定委員会の定款専門官からの指摘事項（8項目）は文言、字句等の軽

団体傷害保険募集方法の変更について

財務委員会

平成 24 年 2 月 1 日より 28 日まで平成 24 年度団体傷害保険募集を行ないます。

例年全会員の皆さまにお送りしておりました『傷害保険のご案内』は、都合により今回から廃止することとなりました。

そのため新規に加入を希望される場合は、下記代理店あて資料請求下さい。

すでに加入されている皆さまには、例年通り案内を送ります。コースの変更、継続停止、ご家族の追加、住所変更などのある方のみ同封の加入依頼書に必要事項を記入の上、下記代理店に返送ください。

これまでと同様の継続となる場合は、従来通り返送は不要です。また、当保険は通年通して加入できます（この場合、保険料は月割りとなります）。

資料請求先＝東京海上自動火災保険株式会社代理店
株式会社東海日動パートナーズ東東京
団体傷害保険資料請求担当 藤田あて
TEL 0120-161-808、FAX 0120-161-809
メール a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp

調査結果は、建物の維持管理に相当な経費を要し、かつ構造上利用

2・清里北沢美術館の利用（森・高原）

③震災復興支援事業 P T（宮崎）
見舞金支給作業は終了した。端数残金の 2 万 3 2 4 3 円は日赤に追加寄付をした。また、日赤からの受領書は関係者に発送した。すべての事務処理が終わる 12 月 16 日をもって当 P T は解散する。

用困難であることが判明した。広く事業の可能性も含め「ルーム検討 P T」が検討をすることとなった。建物持ち主への回答期限は 3 月 31 日。
3・年次晚餐会（高原）
品川プリンスホテルにおいて、4 2 5 名の参加者のもと、整然かつ盛大に開催された。
4・「河童橋上のウエストン一行」写真掲載願（高原）
山と溪谷社から『山と溪谷』2 月号に掲載するための許可願があり承諾した。
5・全国支部事務局担当者会議（高原）

東日本大震災義捐金・見舞金精算書

収入の部

項目	人数	金額
復興支援義援金寄付収入		4,741,153
受取利子		540
合計		4,741,693

支出の部

項目	人数	金額/1名	金額
日赤寄託受領証発行者	34		1,900,000
日赤寄託残金追加			23,243
小計			1,923,243
被災会員見舞金全壊	3	200,000	600,000
被災会員見舞金半壊	10	100,000	1,000,000
被災会員見舞金一部損壊等	19	20,000	380,000
小計			1,980,000
岩手支部見舞金	81	4,000	324,000
宮城支部見舞金	52	4,000	208,000
福島支部見舞金	71	4,000	284,000
小計			816,000
通信等事務費	1 式		22,450
小計			22,450
合計			4,741,693

復興支援 P T

1 月 21 日～22 日開催する。

6・学生部の海外登山遠征（古野）

来年度の学生部海外登山計画がまとまった。インド、ザンスカールの未踏峰（無名峰 6 1 6 5 メートル）で、8 月 15 日～9 月 28 日の予定、6 名の学生隊員で行なう。申請はこれから。

7・学生部皇居周回マラソン（古野・野澤）

11 月 12 日、第 48 回目の皇居マラソンを実施した。1 位は早稲田大学であった。2 年後は 50 回という節目を迎えるので、何か記念することを考えてみたい。

8・ルームギャラリー等における残置物整理（高原）

片づけ期限はすでに連絡の通り 12 月 15 日である。以降は総務担当理事の判断で順次整理していくので、未処理の物は早急に片づけしてほしい。

9・刊行物の適正在庫部数（高原）

『ジャパニーズアルパインニュース』、『山岳』、『山』および『百年史』について、1 月 11 日までに担当理事に検討していただきたい。

10・委員会予算（小林）

来年度の各委員会予算については 12 月 26 日必着でお願いしたい。1 月に入ってから査定日程は別途連絡する。

11・会報『山』12 月号編集報告（萩原）

ルーム日誌

12月

1日 学生部
2日 総務委員会
5日 総務委員会 高尾の森つく
6日 図書委員会
7日 常務理事会 集会委員会

8日 みちのり山の会
9日 フォトクラゲ 集会委員会
12日 青年部 山の自然学研究会
13日 図書委員会 スキークラブ
14日 図書管理委員会 山研運営
14日 委員会 緑爽会
14日 理事会 休山会 JACI

【さんけん通信】

山研利用アッププロジェクト始動！

山研運営委員会 柴山信夫

新年明けましておめでとうございます。今年も上高地山研をどうぞよろしく願いいたします。

山研運営委員会では、「利用アッププロジェクトチーム」を立ち上げ、会員をはじめとする利用者の皆さまがより使いやすい山研へと改善を推進してまいります。

手始めとして、ハード面では地下談話室の環境改善を計画しており、平成24年度にミニ水力発電を利用したLED照明設備の増設を行ないます。これにより薄暗かった地下談話室の居住性が格段に向上します。また、自然エネルギーの有効利用を通じて、日本山岳会の環境問題への取り組みをアピールすることができると考えております。

ソフト面では利用者の視点に立ったサービス向上に力を入れます。具体的な取り組みのひとつとして、従来から利用者に実費で提供している「ご飯と味噌汁」に加え、副食（レトルト食品3種類程度）の提供も開始いたします。食事準備の心配がなくなりますので、入山前あるいは下山後にも気軽に山研を利用していただくことができます。

ここで紹介しました以外にもハードとソフトの両面より改善を進めてまいりますので、会員の皆さまからもご意見等をお寄せいただけますと幸いです。

なお、平成24年度の開所は、4月22日を予定しております。詳細な情報は3月号の会報で案内いたします。

秋田進 (14267)	西澤與志英 (12573)	津田朋二 (11733)	佐藤典子 (11544)	宮代良治 (9120)	退会	新井昇 (12399)	鴨下重彦 (11767)	牧潤一 (8880)	富田弘平 (8878)	中野和郎 (4987)	斉藤俊哉 (2905)	物故	26日 海外委員会 麗山会 12月来室543名	22日 自然保護委員会	21日 三水会 青年部 つくも会	20日 インターネット小委員会 00会 法人PT スキークラブ	19日 総務委員会 資料・映像委員会	18日 JACI-YOUTH	17日 JACI-YOUTH	16日 スケッチクラブ	15日 科学委員会 集会委員会	YOUTH
-------------	---------------	--------------	--------------	-------------	----	-------------	--------------	------------	-------------	-------------	-------------	----	-------------------------	-------------	------------------	---------------------------------	--------------------	----------------	----------------	-------------	-----------------	-------

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
木崎甲子郎	辺境の風景——木崎甲子郎画集	74p / 22cm	出版舎Mugen	2011	出版社寄贈
英国王立地理学協会(編)	ビジュアル版 世界の探検大百科	360p / 31cm	東洋書林	2011	出版社寄贈
GAMO	山岳マンガ・小説・映画の系譜——「山」はいかに描かれてきたのか	237p / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
中西俊明	山岳写真大全 (山岳大全シリーズ No.5)	272P / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
上田豊	未踏の南極ドームを探る——内陸雪原の13カ月(極地研ライブラリー)	239p / 20cm	成山堂書店	2012	出版社寄贈
Gogna, Alessandro	The Alps 360°——The Finest Panoramas in the Alps Captured in Splendid Fold-out Photos up to 2 Meters Long	/ 31cm	Priuli & Verlucca	2010	中村保氏寄贈

INFORM

インフォメーション



◆フオーラム「登山を楽しくする科学(Ⅳ)」開催

科学(Ⅳ)開催 科学委員会

日時 3月10日(土)13～17時

場所 立正大学大崎キャンパス
(品川区大崎4-2-16)

内容 ・「地図の読み方・楽しみ方(環境省生物多様性センター企画官 田中大和)」
・「空が教える山の天気—私の体験から—(東京電気通信大学名誉教授 芳野 勉夫)」

・「登山中の病気とトレーニング」(日本登山医学会理事 野口いづみ)

費用 資料代として500円

申込 ハガキ、FAX、メールで科学委員会事務局長 平野 裕也 (〒157-0066 世田谷区成城4-13)

3-5-202 FAX 03-3-484-896

✉ jacforum@31pc-seijo.com

◆「極北・未知への挑戦」講演会

東京多摩支部

かつてモンゴロイドが移動した足跡を大ざりてたどろうと、シベリアからグリーンランドまで、約2万2000^キの冒険に挑んだ小嶋一男氏のお話をうかがいます。

日時 1月29日(日)16時～17時30分

講師 小嶋一男氏

会場 ザ・クレストホテル立川3階「富士の間」

(〒190-0022 東京都立川市錦町1-33-1 TEL 042-15-21-1111)

申込 岡義雄 TEL 090-2140-15057

◆日本登山医学会の講演会

✉ OkaYoshio@aol.com

日本登山医学会

山岳遭難救助における医療救助の教育、導入と普及を目的に、国際山岳救助協議会医療部会副代表で、かつ国際認定山岳医制度の

表で、かつ国際認定山岳医制度の

国際副責任者でもあるジョン・エラートン博士を招き、世界の山岳遭難医療救助の最前線について、紹介と啓蒙をしていただきます。山岳救助にかかわる人から一般登山者まで、広い層を対象とします。演題 「山岳救助——世界の最前線」

講師 ジョン・エラートン

日時 2月20日(月)18時～21時

場所 主婦会館プラザエフ (〒102-0085 東京都千代田区六番町15番地7)

定員 200名

◆第21回「山好きの山の絵展」開催

期間 2月19日(日)～25日(土)

場所 有楽町・東京交通会館2F

同時開催 田辺壽会員による「第2回登りたい心で描いた山のスケッチ展」

場所 同ビルB1F エメラルドルーム

■訂正とお詫び

2011年12月(799)号、2

ページ1段1行「バルトロ・カンリ」は「クーラ・カンリ」の誤りでした。訂正してお詫びします。

◆編集後記◆

●昨年は大変な年でしたが、新たな気持ちで新しい年を迎えたいと思います。その節目の年に、会報が800号という記念のときを刻みました。小さな特集ですが、5ページほどの記事を作りました。それにつけても思うのは、やはり歴史と伝統、そして大先輩の方たちの持続させる力です。

●尾上会長の号令のもと、以前、4つのプロジェクトが立ち上がりました。そのなかから若い会員たちの声を反映させた活動がや々と実を結んできました。その成果を野沢理事に綴ってもらいました。●会長特別表彰を受けた実川さんに、富士山登頂1212回の実績を寄稿していただきました。その実行力と体力は目を見張るばかりです。(神長幹雄)

日本山岳会報 山 800号

2012年(平成24年)1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社